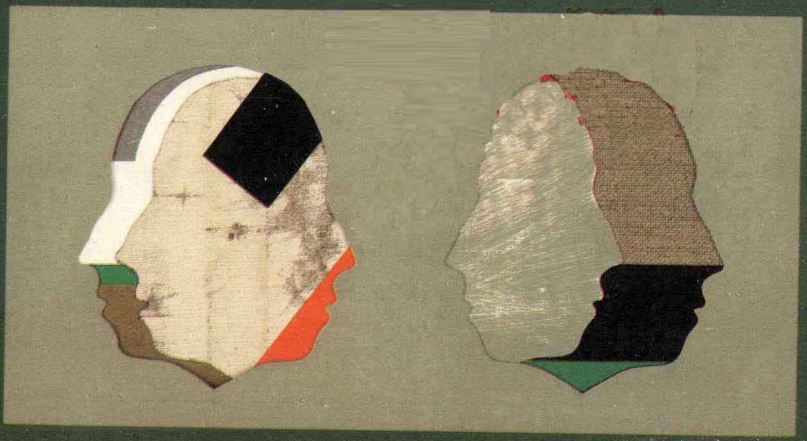
俳優X君への手紙

三國連太郎



明石書店

俳優X君への手紙

著者　©三國連太郎

発行人　石井昭男

発行所　明石書店
東京都千代田区神田神保町一―五六
電話　〇三―二九五―六八四六
振替口座　東京　〇―二四五〇五

印刷　興英文化社

製本　協栄製本

一九八五年六月三〇日第一刷発行

定価　一三〇〇円

〈検印省略〉

0070-0074-0182

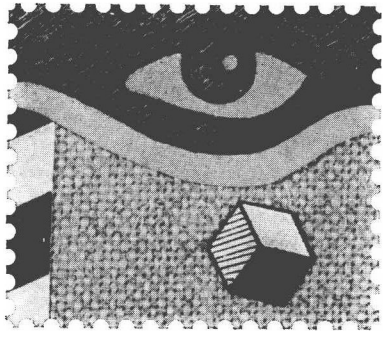
Ⅰ　過ぎ去りし原風景　1
Ⅱ　「芸能者」の発見　57
Ⅲ　閑話休題　㈠　97
Ⅳ　X君の銀幕稼業　103

Ⅴ　閑話休題　㈡　147
Ⅵ　続・X君の銀幕稼業　155
Ⅶ　閑話休題　㈢　199
Ⅷ　俳優X君への手紙　203

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

I

過ぎ去りし原風景



その一

穴だらけの街

右往左往する亡霊

彼が食うことの自由、恋をすることの自由、楽しむことの自由を求めて雪深い山陰の町をぬけだして来たのは、既に歳の暮近いからっ風が肌を刺す或る日のことだった。ラクダまがいだが自棄に重いオーバーを着こんで、余り趣味がいいとはいえない縞柄のダブルと、その頃は滅多に手にはいりにくいドイツ・ボックスの短靴で一応はきめたつもりでいたが、懐中には既に十円札が四枚しか残っていなかった。

彼には、別に笈を背負って何がなんでも上京しなければならない理由があった訳でもなく、ふっと気がついてみたら、東京というゴミの巷にまぎれこんでいたというのが実態である。

二十六歳になった彼は、いってみれば衝動的な男で、一般にいわれる平均的な分別などというものにはまったく縁遠い人格を持っていた。

場所は銀座、戦争の焼夷弾攻撃で穴だらけの街。焼けのこったハツトリの時計塔。彼は、子供の頃にたしか一度歩いたことがある。変わり果てたその銀座の人波を、彼はあてもなく泳ぐようにしている。

都会に住む人は誰でも、こうして一日一回はかならず人波にもまれなければ生活が出来ないのかと、彼は他愛のない憂いを抱いた。

何にもまして彼にとって不思議だったことは、その人波ということより、視界の範囲、人がきめこまれた人形のように俯いて、まるで何か眼に見えない圧力に押し出されてもいるかのように人々が往来していることであった。

彼はふっと、昔、子供時代に家の近くにあった寺の絵馬で見た地獄を思い浮かべた。誇張された鬼の顔がそのまま戦争責任者の面相と重複なってくるのだ。

あと仕末のついていない戦後社会を右往左往する亡霊に、彼は、取りかこまれていくような錯覚をおぼえて身ぶるいした。

私の中のX君

薄皮を剝ぐ

ここに登場してまいりました彼とは、つまり、ほかならぬX君自身の、生きている青春のほんのささやかな状況の断片なのである。これについて、私小説風などと口はばったい言い方をする気持ちはみじんもないのであるが、彼を主人公に一編のストーリーをと思いたったのは、この彼に託して嗅ぎとられる不条理が、社会という流れに浮き沈みするものの軌跡となって、いささかなりとも、その行間から何かが滲み出てくる可能性もあるだろうと思ったからである。

つまらない話であるということは、充分に私も自覚しております。恥多きことですが、まずは私の稼業が、稼業であると割り切らせていただいて、「彼」、つまりは「私」である主人公を狂言廻しに、いささか懐旧の情を込めて、私を忘却の淵から引きずりだす作業を、やってみたいと思いたったのです。親から貰った実名をサラ

リと捨て、虚仮に輪をかけた虚仮の社会。紙に画かれた背景にかこまれて気息奄奄と生命をつなぐ人間の実像を、その「彼」に仮託すれば、母親の胎内ですっぽりと羊水に浮いたまま、無明の闇に何物か(?)、恐らく全体に比較すれば多寡がしれたことなのかもわかりませんが、人間の薄皮を剝ぐことが出来るかも知れないと、彼、つまり、私のなかのX君に、期待めいた思いを賭けたのでしょう。

自分自身が、自らの心の深奥に澱のように沈んで、腐りかけた過ぎ去りし原風景(キザたらしい言葉で照れ臭い表現ですが)を透視してみるのも座興だ、ぐらいに御容赦を戴きたい。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

その二

灰色の街

空腹という事実

X君は、いかんせん空腹に耐え忍ぶしかなかった。

とにかく、いま、この現実に身を処す手段がほかになかったので、なけなしの十円札をはたいて省線（当時）に乗った。そして、環状線の駅の名をグルグルと何度も見過ごしたのである。ふとしたひょうしに足の不自由な若い女性のためにX君は席をゆずると、すしづめの車内から押しだされ、見知らぬ駅のホームに立たされた。キョロキョロすると、そこが池袋駅であることがわかった。前後左右、灰色の街がひらけている。

黄色い豆電球のぶら下がった駅前の狭い路地を、X君の眼は嗅覚をたよりにさま

よい歩いた。

焼けたトタンをのせて、葭簀でかこった屋台の横丁は、ひどく泥濘んでいて、新品のドイツ・ボックスの皮靴がとまどったようにキューキューと哭いた。

大体に、X君の発想法は、やや時代がかるクセがある。戦後間もない頃の池袋かいわいの風景に、いつの間にか雰囲気として飽和してしまうのであった。

いかにも情緒的に世をはかなんでみても、オーバーのポケットに握りしめられて汗にしめったのこり三枚の新紙幣では、空腹という事実はみたすことは出来なかった。X君はなおも望みを何かに託すようにして、一軒ずつ丹念に屋台に貼ってある短冊の価格表をたしかめて廻っている。

伸びかけた顎の無精ヒゲが佗しさを添えて、X君はたびたび生唾をのみこんだ。

快楽の一瞬

線路わきにある古着屋の店内にX君は立つと、干イカのような嗅いのするツルシンボの影に隠れるようにしてオーバーを脱ぎ、着ている上衣を主人の前に投げだした。

「米穀通帳は？」

そこの主人は新聞で目張りをした板壁に寄りかかったまま火鉢を抱え、X君の品物を見ようともしない。

「ないんですが……」

X君は、生真面目そうによそおって素直に答えた。その作り声は恐ろしく純朴で、かげりのない響きとして感じとった主人は、手を伸ばしておもむろにX君の上着の裏表を拡げて品定めをすると、「純毛か!!」と感嘆してニコッと笑った。

しばらくX君と主人の間に沈黙が続いた。結局、売ってしまったら、いまどきなかなか手にはいりにくい品物だから、いつでもいいから金が出来たとき取りに来なさい、月一割の利子を払ったとしても、なくしてしまうよりまだましだと親切そうに口説いて、主人は手提金庫から百円紙幣を十枚数えた。

それは、古着屋の常套手段であった。が、X君には、地獄で仏にあえた思いであり、心温まる言葉としてうけとめた。X君は感謝をこめて深々と一礼した。X君は、その紙幣をわしづかみにすると店をとび出たのである。古着屋は、こうした種類の客は絶対に買いもどしに来る筈がないことを経験的によく知っていた。だから

預り証すら出そうとしなかった。

X君は、そのまま電車に乗ってまた銀座にとってかえすと、在日朝鮮人が経営する中華料理店に這入った。普通なら目玉が飛び出るほど高いとためらう料理を注文して、何日振りかで味覚の天国をさまようのである。

もちろん十枚の百円紙幣に羽が生えて、飛んでゆくのはたまらなく淋しいと思ったが、うまいものの魅惑には勝てなかった。X君にとっていま、美味溢れる一皿の料理は無上であった。かけがえのない快楽の一瞬として、充分に価値があると信じたのである。

X君は、花の香りを添えた食後の中国茶をすすりながら、池袋で席をゆずったあの足の不自由な女性のことを思いうかべた。順次にはがれてゆく着衣の下から、馥郁とした白い姿体が、X君のイメージの中で躍る。弾むような乳房をまぶしく感じた。しかも、それを固く押える両掌を徐々に、恥ずかしそうに、下部に段々とずらしてゆくと、濡れたように艶やかな黒い真直な陰毛をまさぐりはじめた。

X君は、奥歯にはさまった豚肉の筋を小揚子でほじくりながら、自分の股間が急に熱く、つっぱってくるのをおぼえ、慌ててひと呼吸に残りの茶を飲み干した。イ

キる股間のわが物に、お前という奴は根っから、無頼漢根性があるからこういうことになるんだと諫めて、熱気のむんむんした中華料理店を飛び出た。
外は霙のまじった氷雨が舗道を叩いていた。

X君という人格について

卑怯者

X君について、いずれ必要があると思うので、その生いたちを少し追ってみよう。X君は十四、五才で旧制の中学を退学し、両親の家から出奔して、自活を余儀なくされた経験から、いつの間にか、自分の身を守る技術を身につけていた。例えば些細な危険に直面すると動物的にこれを敏感に察知し、事前に身を翻して雲を霞と逃散する、そんな俗性が備わっていたのである。他人は、これを卑怯者なぞと侮って呼んだ。しかしその反面には、この身一つとばかり糞度胸を据えるところもあって、逆境にX君は割と強かった。

そのよしあしは別として、敗戦時はそうした生きざまが世間にアピールしたらしく、二十六才で芸能界に入ったのだが、それなりにセンセイションを巻き起こしたのである。その後、数年もしないうちに業界のしきたりを逆撫でする事件をやらかして仕事にあぶれてしまったりするが、これもその実態をつぶさに観察してみると、X君の卑怯とも野放図ともつかない性格とまったく無関係ではなかったようである。

或る時期、X君は事件を起こして芸能界で喰えない羽目に陥ってしまったことがある。X君はそこで、敗戦後の日本裏面史で特筆されたMという高利貸をたずねるのだ。

そこで対応にあらわれた若い担当者に三十万円の融資を希望した。当然、抵当物件の有無を相手に切り出されるのであるが、もともとそれにみあうような物件をX君が持つ筈はなく、簡単に一蹴されたが、そこは持前の図々しさで、Mなる人物と直接交渉させて貰う機会を摑む。社長室と思われるドアを押すと、〝神の恵みを私するなかれ〟と正面に大書されていて、お世辞にも上手な字とは言えそうもない代物だが、妙にX君の目をひいた。はじめ金貸しという生業とその文言が、どう脈ら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.